

珍しい植物を数多く育てている温室を探索していると、使用人の影が見えた。雑談しながら水をやる彼女らの様子をなんとなく眺めていると、メイドの唇の端が歪む。

「どちらのお嬢様が奥様になるのかと思いきや、まさか妹の方だなんてねえ。姉と違って全然魔法の才能がないらしいじゃない。結婚して大丈夫なの？」

くちさがないメイドの言葉に、身体が強ばる。明らかにわたしの悪口だったからだ。

「結婚して大丈夫なものにも、うちの家格じゃあお姉さまの方は無理でしょ。美人で有名で、魔法の腕もピカイチ。そんなお嬢さんをうち程度の家に出してくれるわけないでしょ。旦那様もわかってるから妹の方に言い寄ったんじゃないの？」

「は、いえてる」

クスクスと嘲笑する彼女たちに、顔がかあつと熱くなる。姿を見せて言い返して

やりたいと思うのに、唇が震えるだけで言葉がでない。逃げるように温室をあとにして、庭の片隅でうずくまる。湧き上がる涙をこらえていると、影がかぶさった。深呼吸してから顔を上げれば、銀髪の青年が心配そうに顔を覗き込んできた。

「レオナさん、ここにいらっしゃったんですね。おや、どうしたんですか、浮かない顔をしていますか」

うつむくわたしの頬を撫でながら、気づかうようにのぞき込んでくる。わたしはきゅっと唇を結んで顔を上げた。

「……リンハルト先生」

「もう私たちは夫婦なんですから、先生はいりませんよ」

彼はわたしたち姉妹の魔法の家庭教師だった人で、わたしの夫でもある。美人で引く手あまたの姉と違い、その添え物のように扱われるわたしになぜか求婚してきた、両親もこの機会を逃すまいと早々に話をまとめてしまった。年子の姉はプラチ

ナブロンドのふわふわとした巻き毛の持ち主で、纏う雰囲気もおやかな美人だ。おまけに両親の魔法の腕を引き継いでいる才媛だ。わたしは容姿も平凡な黒髪で、瞳もくすんだ茶色だ。幼いころから褒められるのは姉ばかりで、わたしはずっと姉のおまけだった。

先生は長身で、わたしより頭二つ分ほど背が高い。それでも圧迫感を感じさせないのは穏やかな物腰のせいだ。さらさらとした絹糸のような銀髪も、整った顔もすべてが輝きに満ち溢れているが、神様は一つだけ先生に欠点を与えた。左右で瞳の色が違うのだ。

右が青色で、左が黄金色の異なる輝きを持っている。信心深い人々はそれを不吉の証だと信じていて、それ故に先生は大変な苦勞をしてきたらしかった。

三十手前になるまで、婚姻話が決まらなかったのもそのせいらしい。苦勞してきたのに穏やかで、博識で、恨み言の一つもいわない。先生の隣に立っていると、自

分が小さい人間だと思い知らされる。

思わずじいと不躰に先生の顔を見つめてしまう。左右で色が違う瞳はとても綺麗で、これを不気味だなんていう人の気が知れない。でもこれが他の人たちと同じなら、先生は姉と結婚していたかもしれないのだ。

「……レオナさん？」

「いえ、なんでもありません。少し疲れたので休んでもいいですか？」

「ええ、もちろんです。まだ不慣れな生活だから気疲れしたんでしょう。あとで果物の砂糖煮をもっていかせましょうか」

その言葉に、びくりと肩が震える。わたしをよく思っていない使用人が部屋を訪れるかもしれないと頭をよぎってしまう。

「いえ、大丈夫です。あまり食欲がないので」

心配そうな先生の視線を感じながら、背を向ける。きっと姉ならこんな惨めな思

いはしないだろう。そう考えると、胸がきゅつと詰まってい_く。息苦しさを覚えながら、わたしは与えられた自室へもどった。

その日以来不安に苛まれたわたしは、徐々に幼いころのような癪癪を起すようになった。愛情を注いでくれなかった両親と離れて、新しい生活がはじまると期待していた分歓迎されていないとわかって余計に気分が沈んだのかもしれない。

「先生、紅茶にはジャムを添えてくれないといらないうちにいいましたよね。使用人たち、ちゃんと教育してくださいよ」

内気でうつむいていたはずのわたしは、気が付けば夫に対してわがままに振舞っていた。紅茶の飲み方は気分どころろ変えて、それに合わせてくれないと子供のようにわめく。料理の切り方にも口を出して、料理人たちの眉を顰めさせた。

それでも先生はずっとやさしくて、それ故に不安になる。自分でも精神が不安定になっているとわかるのに、制御ができない。気づけばわたしは実家にいたときのように引きこもりがちになっていた。けれども、先生は根気強くわたしに向き合ってくれた。

ぽろぽろと自室のベッドでシーツにくるまって泣くわたしの頬を、あたたかい骨ばった手が包む。

「せんせ、わたし……」

「大丈夫ですよ、まだこちらの生活に不慣れだから気分が苛立ってるんです。レオナさんは本当は優しい女の子だって私は知ってますよ」

しっとりとした唇が、頬に触れる。ぼやける視界に瞳を閉じれば、触れるだけ口づけを落とされる。姉と結婚するはずだった人だ。先生の瞳が他の人と同じでさえあれば、わたしなんかと妥協して結婚することもなかったのに。

「先生の瞳、薄暗いところでも色が違うのわかりますね」

そっと毗に手を伸ばすと、いままで穏やかな笑みを浮かべていた顔がわずかに強張る。

「……リンハルト先生の瞳、綺麗。綺麗すぎて、こわいくらい」

「レオナさん？」

銀色のまつげに縁どられた瞳を食い入るように見つめると、先生が少したじろぐ。

「……他の人と同じならよかったのに」

ぽつりと漏らして、はつとして口を噤む。先生はわたしの頬を撫でていた手を下ろして、おもむろに立ち上がった。

「っ、せんせ……！　ごめんなさい」

「どうして謝るんですか？　私は、怒ってはいませんよ」

見下ろす顔はいつもと同じ微笑みをたたえているけれども、どこか突き放すように聞こえる。ドクドクと、胸がいやな音を立てて高鳴っていく。ゆっくりと部屋の出口に向かっていく広い背中に手を伸ばす。先生はわずかに振り返ったけれども、ベッドへと戻ってはくれなかった。

——嫌われた。嫌われた。

幼いころ両親が姉のドレスばかり新調して、わたしにおさがりをよこすものだからこんなもの着ないと暖炉にくべたことがあった。柔らかい絹が燃えていく様と交互にわたしの顔を見つめた母が、呆れたように微笑んだ顔はいまでも思いだすたびに背筋が凍る。

「……もう、やだ」

このまま両親に嫌われたように、先生にも嫌われてしまうんだ。

「……もういつそのこと、嫌われてしまおうかな」

もういつそのこと呆れられてしまえば、余計な希望を抱かずに済む。やさしい腕も、もうわたしを抱きしめることがないと確信できれば、いつ失うかもしれないぬくもりにおびえることもない。月がてっぺんに上る時間、毎日メイドが様子を窺いに来る。無断で抜け出せば、すぐに騒ぎになるはずだ。使用人たちは草の根を分けでも一応は先生の妻であるわたしを探し出そうとするだろう。そして素知らぬ顔を

して朝帰りでもしてしまえば今回ばかりは先生も擁護できない。

供もつけずに日が昇るまで遊び惚けるなんて、貴族の貴婦人あるまじきことだ。口さがない人々はこぞつて噂をして、不吉な瞳を持つ男の妻なんてよほど開放的でないで務まらないと噂するに違いない。

「……魔法の授業はいつも落第しそうだったけど、これだけは得意だったのよね」
昔覚えた不思議な揺らぎの音を口にすれば、指先からカラダが透明になっていく。一時的に姿を見えなくする魔法だ。人より消えてしまいたいと思うことが多かったから、こういう魔法が得意なのかもしれない。人目を忍びながら部屋を抜け出し、おぼろげな蠟燭の灯りを頼りに廊下を歩いているとふいにポンと肩を叩かれる。身を竦ませておそろおそろ振り返れば、そこにはここにはいないはずの夫が立っていた。

「レオナさん、お出かけですか？」

「……せんせ」

なんで、という疑問を口にしようとして飲み込む。この魔法を教えたのは他ならぬ先生なのだから、見破れないはずがない。

「こんな夜更けに夫に黙ってお出かけするなんて、悪い奥さんですねえ」

震える肩を抱かれてから引き寄せられる。にっこりと笑っているけれど、声に温度がない。

「お部屋に帰ってたっぷりお話を聞かせていただきますよ、レオナさん」

扉を閉め垂れた瞬間に、がちやりと内鍵をかけられた。そのままゆっくりとこちらを振りかえった先生は、わたしの身体を壁に追い詰める。

「一人で出かけて、どこに行こうとしていたんですか。ご実家、ではないでしょうし」

押し黙るわたしにふむと先生が頭をひねる。

「わたしの他に、頼る男の人でもできましたか」

なにか誤解をしたらしい先生の言葉に目を見張る。わたしを嘘でも愛しているなんて囁く男性は、先生のほかにいない。生まれてこの方、男性の視線はすべて姉のものだった。それなのに先生は、見当違いなことを考えている。他のひとに奪われるのは癪に障るくらいには、わたしに執着しているんだ。

ほの昏い恋心が満たされた気がして、思わずちいさく頷く。こんな嘘をついたってどうしようもないのに、バカな真似をやめられない。生まれてこの方、愛されたことなんてなかったから人からどんな感情であっても、わたしに向けられていることで満たされてしまう。それが大好きな先生であれば、なおさらだ。

「そうです先生、こんなわたしでも好きってやさしく抱きしめてくれる殿方がいるんです。そのひとの腕の中は安心できて、とっても満たされるの」

挑発するように笑うと、先生が眉をひそめる。いつもやさしい先生がわたしにプ

ライドを傷つけられて、穏やかな笑みを取り繕うこともできないことにぞくぞくと背中が粟立った。

「その方は、他の人と同じ瞳であなたを見つめるんですか？」

先生がぽつりと呟いた言葉が聞こえずに聞き返そうとすると、顎を長い指で掬われて持ち上げられる。気づいたときにはあたたかいものが唇に触れていた。

「んっ、んんっ……！」

尖った舌が無理やり入り込んで、口蓋の敏感な部分をなぞる。その熱さに困惑して、棒立ちになって動けなくなる。

「ふふ、驚いて声も出ないみたいですね。それとも、あなたのいいヒトはこんなキスもしてくれないんですか？」

左右で色の違う瞳を細めながら、背中を撫でられる。骨ばった指がボタンを探し当てて、あつという間に外していった。

「や、リンハルトせんせ」

布の重みに従って落ちようとするドレスを拾い上げようとしたら、両手首を掴まれて壁に押し付けられる。

「やだ、せんせ。みないで」

「ダメですよ、レオナさん。別の人にも見せているのならわたしにだって見せられるでしょう？」

肉が付きやすいカラダを見られるのが恥ずかしくて首を左右に振る。けれども先生は手を止めてくれなかった。コルセットの紐をほどかれると、ぷるんと胸が露出してまじまじと見られてしまう。

「レオナさんのカラダを見るのは初めてですが、豊満できれいな身体をしていますね」

胸の膨らみにためらいなく手を伸ばされて、やさしく指を沈められる。胸の根元

から持ち上げられて軽く揺さぶられて、たゆんたゆんと波打って揺れる。いやらしいカラダだと辱められているようで、目を伏せてしまう。

「や、やめてください……」

「やわらかくてしっとりしてて、とっても素敵なお胸ですね。家庭教師としてご実家に伺っているときからこうして触りたくてたまらなかったんですよ」

先生が右端だけ口を吊り上げる。いままで見たことのない表情に、ぞくりと背中が粟立った。

「あ」

たじろいで後ずさろうとしても、背中には固い壁の感触が伝わるだけで距離なんて取れない。

「気づきましたか？ わたしもただの男なんですよ。目の前に魅力的なカラダがあれば貪りつきたくなるんですよ♡」

拒絶の言葉を口にしようとした瞬間、キスされて塞がれる。くぐもった声は、自分でもなにをいつているかわからない。おっぱいをやわやわ揉まれながらキスされてるだけなのに、いままで知らなかった熱に頭が混乱していく。いままでもハグやキスはしたことがあったのに、全然違う。親愛のそれと、エッチなことをされようと欲を引き出すように触られるのって、こんなに違うんだ。

唾液を口腔に染み渡らせながらキスされて、おっぱいをもまれたら好きなひとに触られていると頭がぼうつとしてしまう。愛されていないとわかっているのに、縋りつきたくなってしまう。

「ふあっ、せんせ、キス、ダメですっ」

「だめ、じゃないでしょう？　それとも、別の人には触れさせてもわたしには触れさせられないんですか？」

悪い子ですなえと耳元で囁くと胸の飾りの周りをするりと指でなぞられる。

「ふっ♡」

乳輪を焦らすようにすりすりとなぞられて、ぷるぷる♡と乳首が震えてしまう。

「おや、レオナさん。期待してるんですか？ いけませんねえ」

指さす方に視線を向ければ、ピンク色の突起が頭をもたげてぷくっ♡と膨らんでいる。乳首のてっぺんをソフトタッチでくすぐられるように触られると、ぞくぞく♡と太ももが震えた。

「あ♡♡」

まだキスされて、おっぱいさわられてるだけなのに。好きな人にいやらしく触られた身体が期待しちゃってる。戸惑いながら整った顔を見詰めれば、指の腹が乳頭をやさしく撫でさする。

「ふっ♡せんせ、それっ♡」

「かわいい声、出てますね。そうやってほかの人も誘ってるんですか？」

人差し指と親指で両乳首をキュッ♡とつままれて、根元から先端までゆっくりしごかれる。指が往復するたびにあまいものがからだを巡って、それだけなのに腰が抜けそうになる♡

「せんせ、ちくびだめ♡ちくびや、です♡」

ひどくあまったるいこびた声が勝手に口からあがる。思わず口元を手で覆うようにして塞いだけれど、先生は手をゆるめない

「レオナさん、初夜をいっしょに過ごそうとしたときにわたしにいましたよね。男のひとに触れるのはこわいから待ってほしいと。かわいいあなたのお願いだからと触れずにきました。あなたを信じていたからこそ、この柔らかい肌に触れた男がいると思うと全身の血が煮えくり返りそうです」

穏やかな声に怒りをにじませたまま、カリっ♡と爪が乳首を掠める。ぴくっ♡と肩が震えて、気持ちいいのを隠せない。

「レオナさんは乳首がお好きなようですね。その男はどんな触り方をしてきたんですか？」

赤く充血した乳首の表面を、すりすり♡されながら詰問される。敏感な突起から伝わる甘い痺れが、まだ触れられてもない場所をじゅんっ♡と湿らせていく。

「そ、れは」

愛人なんて本当はいないから、答えられるはずもない。押し黙ったわたしに先生は眉をしかめて、むにゅん♡とおっぱいを揉みしだく。指を乳首に沈めて一番敏感な先っぽをほじるほじするように小刻みに指を動かした。

「っ♡んぶっ♡」

「しかたないですねえ、レオナさんが教えてくれないならたくさん試してカラダに聞いてあげましょうね」

ぐにぐに♡とおっぱいのかたちをかえられながら、乳頭の奥を刺激されるとふる

ふる♡と太ものの内側が震えてしまう♡自分で触ったことがないわけじゃないけれど、こんなに気持ちよくなかった。

「レオナさんの乳首、固くなつてわたしの指を押し返してきます。触りやすいように勃起させて、健気でかわいい乳首ですね♡」

丸い乳房の先端でぷくっ♡と充血した突起を指でつまみ、きゅゅっ♡と引っ張られる。おっぱいを引っ張られて細長くされて、乳首しごかれて呼吸が荒くなるのが隠せない♡

「くっ♡」

「レオナさん、おっぱいきもちいいですね♡ほら、ちゃんとおっぱい気持ちいいですってわたしに教えてください。魔法のお勉強をいっしょにしていたころのようにちゃんとコミュニケーションしましょうね♡」

糸をこよるように指で乳首をねじられながら押しつぶされて、ぷくっ♡と腰が跳

ねる。頭のなかがだんだんぼやけていつて、きもちいいことをもつとされたくなる
♡

「ほら、レオナさん。いま誰になにをされて、どこが気持ちいいんですか？」

まるで生徒に教科書を音読するように指示するようなやさしい声で囁きながら、
きゅっ♡きゅっ♡と乳首を指で揉まれる。固くしこった突起からじいん♡と伝わる
熱が難しいことを考えられなくさせる。

「ちくびっ♡せんせいにちくびしこしこされてっ♡きもちいいですっ♡」

オッドアイを見つめながら白状すれば、切れ長の瞳がうっとり細められた。

「レオナさん、ちゃんと言えましたね。やつぱりあなたは教え甲斐のある生徒で
すよ♡」

ぼて♡と赤く腫れた乳首をぴんっ♡と指で弾かれる。ずーっと小刻みに指を動か
されて、熱がたまっておなかでぐるぐるする。すきな人におっぱいいじめられるの、

こんなに気持ちいいなんて知らない♡

「はふっ♡やあっ♡」

「いや、じゃないでしょ、レオナさん」

やさしく咎められて、ぷるっ♡と乳首が震える。恥ずかしいのに、自然と唇が開いた。

「き、きもちいいっ、ですっ♡ちくび♡きもちいいのっ♡」

身をよじれば、先生の手のひらにぺちぺち♡とおっぱいが当たる。おねだりして
るみたいだけど、勝手に反応してしまっただけで止められない。

「おやおや♡ちゃんときもちいい♡って伝えてくれてえらいですよ♡ご褒美を
あげましょうね♡」

たぶん♡とおっぱいを持ち上げられて、整った顔が近づいてくる。ぼうつとする
頭で見つめていたらぽかっ♡とひらいたくちの中に招き入れられてしまった。あた

たかくて柔らかい筋肉に乳首がからめとられる。

「ひあっ♡」

ぢゅっ♡と先生がくちを窄めれば、肉壁がびったりと乳首に張り付いて圧迫してくる。散々いじくりまわされて腫れたそこに、じわじわ唾液をしみこまされる。

「ふっ♡んん♡」

指で触られるのとはまたちがう感覚に、腰が砕けそうになる。乳首が濡れていく感覚にドキドキしていると、ぐにゅ♡と乳頭に尖った舌が押し当てられた。

「せんせっ♡それはっ♡」

先生がしようとしていることを察して声を上げる。乳首ぢゅっ♡って吸われながら舌で奥ホジホジなんてされたら、きつと立ってられなくなっちゃ♡

ぜったいだめ、と警告する理性とは裏腹に、わたしの腕は先生の頭をぎゅっ♡と抱きこむ。はやく乳首いじめて♡っておねがいしてるみたいだ。

ぢゅっ♡と軽く乳首を吸われたら、もう我慢できなかった。卑しいことを口走って、先生に今日見放されるとしても、気持ちよくされたい欲望に抗えない♡

「せんせっ♡ちくびっ♡ぢゅっ♡ぢゅっ♡ってすってください♡したで、ほじほじしてっ♡」

期待で荒くなる呼吸を隠せないままお願いすれば、たっぷりの唾液でぬるぬるになった突起が軟らかい筋肉が迫ってくる。びったりと密着させられた筋肉が乳首を締め上げると、思わず腰が突き出てしまった♡

「んあ♡ちくびきもちいいっ♡せんせいにちゅうちゅうっ♡てされるのっ♡きもちよくてへんになっちゃう♡」

あまったるい喘ぎ声をあげるわたしに気をよくしたのか、先生が思い切り乳首を吸いながら顔を左右にゆさぶる。その振動が伝わって、吸われてるだけでもきもちいいのにもっと痺れがつよくなっていく♡

「ふっ♡うう♡」

ふくらはぎの筋肉がつっぱって、ガクガクと全身が震え始める。困惑するまま高まるカラダをとめられない。先生は一度くちを離してからぱくりと片方の乳首を吸い始めた。唾液で塗るついた乳首を指でしごかれながら、ちゅうちゅう♡ともう一方の突起を吸われる。両方に違う刺激を与えられて、ひくひく♡と指一本も触れられていないはずのおマンコが切なくわななきはじめる♡

「おっ♡んおっ♡やああ♡」

乳首だけでイくなんて、淫乱だと思われちゃう。

唇を噛んで耐えようとするけれど、乳首を吸われながら吸い上げられると声が我慢できない。

「レオナさん♡イっていいですよ♡ほら、我慢せずイキなさい♡」

脳みそを蕩かしそうなあまつたるい声でささやきながら、先生が舌で乳首を激し

くビンタする♡高まっていた熱が一気に全身を駆け巡って、ふくらはぎの筋肉がつっぱって上体が反る♡

「イクっ♡ちくびでイっちゃう♡」

ガクガクと全身が震えて、腰が大きく突き出る♡勝手にへこへこ♡と前後に腰が震えて、絶頂アピールしながらイってしまった♡

「レオナさん、とーってもかわいかったですよ♡」

よしよしと背中を撫でられて力が抜けていく。涙目のまま先生を見上げれば、腕を引かれてベッドに押し倒された。

「あ♡」

ベッドに横たえられたわたしに影が覆いかぶさる。上着を脱いでからブラウス姿になった先生が首元を緩めた。長身で細身の印象が強い先生だけれど、骨格や体格はやっぱり男の人だ。

「ふふ、そんなもの欲しそうな顔をして。もつと早く手を出してあげればよかったのかもしれないね」

ガーターベルトを外されてからショーツをずり下げられれば、ぬかるんで熱くなった秘裂が外気に晒されてぶるりと震えてしまう。

「おやおや、乳首をよしよしってされただけでトロトロじゃないですか。誰に仕込まれたんですか」

が頭のとっぺんからつま先までじとりとした先生の視線が這っていく。軽率な嘘を後悔しながら、顔をそむけるしかできなかった。

「私のかわいい奥さんがお世話になっっているんですから、挨拶しないといけませんね。レオナさん、いったいどなたと会うつもりだったんですか？」

「……それは」

そんな相手、はじめからいないのだから名前を口にできるはずがない。潔白な人

間を浮気相手に仕立て上げるほうが問題だ。どうすればいいかわからずに押し黙っている、先生がため息を吐いた。その吐息が両親がわたしを見放したときの響きに似ていてきゅっとシーツを握りしめる。

「そうですか。せっかく素直になってくれたと思ったんですが。ではやっぱりカラダにきくしかありませんね」

先生が不思議な響きの言葉を口に上らせたと思えば、まるで貧血のときのように一瞬意識が遠のく。なんだったんだろうと疑問にかんじていると、先生がゆつくりとわたしの膝を立てた。そしてそのまま左右に大きく開こうとする。

「っ、せんせ、やだ……！」

たいせつな場所、全部丸見えになっちゃう。反射的に足を閉じようとするが、カラダがいうことをきかない。意識ははっきりしているのに、筋肉への信号が途切れたみたいだ。

「……え」

「ああ、カラダに害のある魔法ではないので大丈夫ですよ。ちょっとカラダの自由はきかないかもしれませんが」

なんてことはないことのように笑いながら、先生がくちゅりと秘裂にたくわえられた愛液を掬って、クリトリスに塗り込んでいく。指の腹で敏感な秘豆をすりすり♡と撫でられると、おマンコがきゅう♡と収縮してしまう。

「んひっ♡」

「きもちいいのはちゃんとわかりますから♡」

目を細くしながらくちゅ♡とクリトリスの根元をくすぐるように撫でられる。そこから裏筋をゆっくりと擦られて、背中に気持ちいいのが駆けあがっていく。

「ふぁ♡やらっ♡」

「おやおや、レオナさんはここも弱いんですね。ゼーんぶ敏感なんですね♡まだ少

ししか触っていないのにエッチなお豆さん、こんなにトロトロになってますよ♡」

わたしがいやらしいことを証明するように、クチクチ♡と粘っこい水音を立てながらクリトリスを押しつぶしながら揺さぶられる。こんなことされたら、すぐにクリトリスも膨らんじやう♡

「やあ♡リンハルトせんせ、やめてえ……♡」

カラダが動かないせいか気持ちいいのが逃げていかずに、おなかの奥に全部溜まっていつちやう♡

「ほら、レオナさん。わたしに教えてくれる気になりました？」

「や、おしえ、ませんっ……！」

「レオナさんは意地っ張りですねえ。ここはこんなに素直に大きくなってくれているのに」

先生の細長い指がきゅっ♡と頭をもたげかけたクリトリスを摘まんでちゅこ

ちゅこ♡と抜き始める。きゅう♡と子宮が痺れて、パクパク♡とおマンコが口を開閉しはじめた♡

「おん♡やつ♡クリトリスしこしこだめっ♡んおっ♡おほっ♡」

目を剥いて喘ぐしかできないわたしを見下ろしながら、先生は容赦なく根元から先端までクリトリスを抜きあげる。濁った声をあげて、はずかしいのに我慢できない♡

「ん？ しこしこはダメですか？ 失礼しました」

一瞬先生が手を緩めてほっと胸をなでおろしたのもつかのま、裏筋を執拗に擦り上げられる。

「ひぎゅっ♡にやんで♡」

「シコシコ、はだめなんですよね♡裏筋をすりすりされるのが好きなのかとおもいまして♡」

大きくなったクリトリスの裏筋を執拗に撫でられる。根元から先端まで指の腹でずーっと撫でられると、愛液が溢れ出て止まらない♡敏感な裏筋から先端へと指が移動するときに、亀頭も一緒に擦り上げられて奥が切なくなる♡

「裏筋も、いやあ♡よわいんです♡♡そこ♡♡」

「へえ、裏筋がよいですか？ それは自分で発見したんですか？ それともお世話になつてゐる男のひとに仕込まれたんですか？」

「……っ！」

少し低くなった声に、思わず押し黙る。先生はもう一度はあ、とため息をついてからサイドテーブルの引き出しを開けた。

「……小瓶と、筆？」

見せつけるように目の前に掲げられた小瓶には、ハチミツ色のどろりとした液体が入っている。きゅぽんと栓をぬいてから、そこに真新しい筆を中に入れてから取

り出した。ぽたぽたと垂れてくるくらいに液体を含ませたそれに、嫌な予感がする。

「……っ！」

「だいじょうぶ、怖いモノじゃありませんよ。ただもう少し素直になっていただきただけですから」

ぴと、と穂先を胸にあてられた場所が、熱をもっていく。痒いような、灼けるような感覚に戸惑いながら先生を見つめた。胸のまろみにそって垂れていく液体が伝った場所だけ、うずいていく。

「せんせ、これ」

「気持ちよくなるお薬ですよ。レオナさんが意地っ張りですからこれで頭真っ白にしましょうね♡」

ぺたぺた♡と液体を乳首に塗られて、こそばゆいと感じたのは一瞬だけで、すぐにジンジンと熱くなる。腫れぼったい乳首が媚薬を吸って、ピン♡と尖っていく。

「い、いやっ♡これ、やめてくださいっ♡」

「心配はいりません。宮廷のご婦人たちも使ってるものですから。ちょっと夜を楽しくするだけのものですよ。レオナさんのいいヒトはこういうものは使わないんですか。いけませんねえ、愉しくしてあげる努力が足りません」

ふうふうと息を荒くするわたしに構わずに、先生はたっぷりと身体中に媚薬を塗りたくっていく。ぬるついた乳頭を執拗に筆で撫でられて、気がおかしくなりそうなくらいに気持ちいい♡

「おっ♡ほっ♡ちくびっ♡イクっ♡イクのおっ♡」

頭が痺れて、限界なのに腰は跳ねあがらない。なんで、と目を見開くと先生がわたしの考えを読んだように囁いた。

「レオナさん、イキたいのにイケないんですか？ 魔法でカラダの筋肉の働きを鈍くしていますから、頭できもちいい♡っておもっても身体が反応するのが遅れてし

まってるんですね」

「なっ……！」

はやく極めて熱を下げたいのに、イケない。それを告げられた瞬間に血の気が引くような心地がした。

「でもイケないってわけじゃないですよ。焦らされて焦らされておっきいアクメ決めたらきつとレオナさんが付き合ってるひとがしてくれるよりも、もーつときもちいんですよ♡」

おそろしいことをさりと口にしながら先生は穂先をまた媚薬に浸す。とろとろと愛液を垂れ流すそこを覗き込まれて、見せつけるようにゆっくりと筆が近づいていく。

「っ、せんせ、やあ、おねがい、やめてえ……」

わたしのわがままにいつも困ったように眉尻を下げる先生の顔を祈るように見

つめる。愛されないならいつそ見放してほしいと望んだのに、どこかでまた許されることを期待してしまっている。

懇願するように見つめても、先生はわたしの願いを聞き入れてはくれなかった。

「そんな顔してもだーめ、ですよ♡レオナさん。これはおしおきです」

ぬと♡と粘度の高い液体がクリトリスに触れる。ずりゅん♡とクリトリスの側面に媚薬を塗り付けられていく。

「ひぎゅっ♡♡♡やらあっ♡あついっ……！ あちゅいい！」

「はは♡かわいい声♡この声、他の男が先に聞いたのかと考えると頭がどうにかなりそうですよ。ほら、右にも左にも、根元にも先端にもたっぷり塗ってあげますね♡だから、誰にも聞かせたことのない必死な声で鳴いてくださいね」

ぷっくりと膨れ上がった肉豆の、わずかな窪みにもたっぷり媚薬をしみこませた穂先が滑っていく。

「♡あつつ♡あちゅいっ♡おかしくなるっ♡おかしくなるうっ♡」

敏感な肉豆をひたひたにされて、媚薬が愛液と混じってポタポタと落ちていく。秘裂の隙間にも入り込んで、入口をほじくりかえしてたまらなくなる。

「レオナさん、涎垂れてますよ」

指先で唇の端をぬぐいながら、先生はぺたぺたと肉豆にしつこくハチミツ色の液体を塗る込んでいく。

「すごい♡ビンビンですねえ♡おマンコからここだけぴょこっ♡と顔を出してますよ」

肥大化したことを思い知らせるように根元から先端まで裏筋をゆつくりと筆が往復する。それだけでパチパチと脳裏に火花が散るほど気持ちいい♡なのにイケない♡イク寸前の、あと一撫でされたら絶頂してしまう気が狂いそうな焦燥感。

ずーっとそれが続いてて、頭がおかしくなるっ♡